理事退任の弁

前理事・名誉顧問　小堀鐸二

いつの間にか、日本はすっかり長寿社会になってしまっている。私の世代がどうも、その渦中にいるようだ。昔は70歳を過ぎた老人が死ぬと、その死を悼むよりも長寿を全うしたことを目出度いとされた。ところが現代の日本では70歳ぐらいは年寄りの序の口で、厚生労働省の調査によれば、平成12年の日本人の平均寿命（0歳における平均余命）は男が77.72年だそうだから、ただ単に幾分、年数を重ねて生きたから目出度いなどという単純な扱いにはならない。つまりこれからの日本の長寿社会では、長寿とは飽く迄も個人の範囲内の問題にとどまり、個人を取り巻く社会がそれを評価したりはしなくなるだろう。

ところで、私は今年の誕生日で82歳になる。若いときから病弱だったので、自分でも驚いているが、昨年の秋に協会の理事会の通知をもらった時、偶々誕生日の直前だったせいもあって、いつまでも続けていていいものかという気持ちになった。そもそも協会の役員には定年の決まりがない。今までは大学の定年を過ぎた人たちが、おおらかな歴史と環境をつくりだしてきた。理事として格別の手当てがでるわけでもないから天寿を迎えるまで気楽に過ごしてこられたのだと思う。それが今度は長寿社会になって、ついまだまだ元気だと頑張ってしまい、後進に道をゆずるという奥ゆかしさを忘れ掛けてしまっている。80歳を過ぎるまで理事職に留まってきた反省と共に、誰かがこの際、定年の事を言い出さねばという思いから辞任を申し出た次第だ。

さて序ながら長寿社会に見られる最近の現象について触れて置こう。

近頃ほぼ同年輩の友達から自分史とも言うべき出版物が送られてくるようになった。自分が生まれ育った時代背景、その中で如何に生きてきたか。特に第2次世界大戦では我々はかけがえのない友人達の多くを失っているが、彼らが今、生きてあればという思いは、自分たちが戦後の復興の旗手として歩んできただけに、こうした年頃になってしきりに懐旧の思いに駆られるとでもいったらよいのか。

中には形を変えて山頭火ではないが歌を詠み、歌集に託しておのれの歩み来た足跡をたどる友人もいる。あるいは又、当時の軍隊の理不尽な一挙手一投足をドキュメンタリ風の戦記物のように記述して、これを戦争を知らない孫たちに読ませたいという注文つきのものもある。

概して言えば、自分史または自分史的なものを出版される連中は、物心共に豊かで元気な老人たちなのである。とは言ってもこの年頃になると、内心は、いつお迎えが来るか分らぬといった不安を抱えている。物事の決定に当たって、それとなく往生際の悪い心境にふっと襲われかねないのも、長く生きてきた年寄りの内面の心理なのである。